





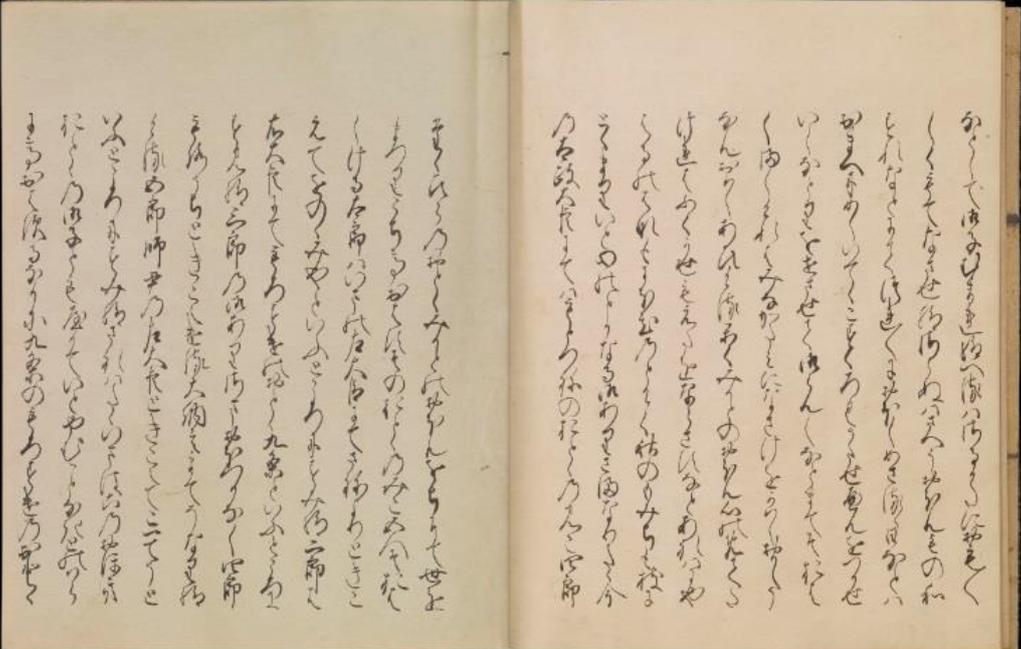


おとこみ二十六人、をんなみこあまたおはしまし  
けり。そのころの太政大臣、もとつねのおとどとき  
こえけるは、宇多のみかどのおほんときうせ給  
ける。中納言長良ときこえけるは、太政大臣冬嗣  
の御太郎にぞおはしける、のちは贈太政大臣とぞ  
きこえける、かの御三郎にぞおはしける。そのもとつ  
ねのおとどせ給て、のちの御諡昭宣公ときこえ  
けり。そのもとつねのおとど、おとこぎみ四人おはし  
けり。太郎はときひらときこえけり。左大臣まで  
なり給て、世九にてうせ給にけり。二郎仲平と  
きこえけり、左大臣までなり給て、七十一にてうせ

給にけり。三郎、兼平ときこえけり、三位までぞお  
はしける。四郎たゞひらのおとどぞ、太政大臣まで  
なり給て、おほくのとしごろすぐさせ給ける。その  
もとつねのおとどの御女の女御のおほんはらに、だいに  
のみやたちあまたおはしましける、十一のみこ寛明  
しんわうと申ける、みかどにゐさせ給て、十六年  
おはしましてのちにおりさせ給ておはしけるを  
ぞ、朱雀院のみかどは申ける。そのつぎ、おなじ  
女御のおほんはらの十四のみこ、成明のしんわうと申  
ける、さしつゞきてみかどにゐさせ給にけり。てん  
けい九年四月十三日にぞゐさせ給ける。朱雀院

給にけり。三郎、兼平ときこえけり、三位までぞお  
はしける。四郎たゞひらのおとどぞ、太政大臣まで  
なり給て、おほくのとしごろすぐさせ給ける。その  
もとつねのおとどの御女の女御のおほんはらに、だいに  
のみやたちあまたおはしましける、十一のみこ寛明  
しんわうと申ける、みかどにゐさせ給て、十六年  
おはしましてのちにおりさせ給ておはしけるを  
ぞ、朱雀院のみかどは申ける。そのつぎ、おなじ  
女御のおほんはらの十四のみこ、成明のしんわうと申  
ける、さしつゞきてみかどにゐさせ給にけり。てん  
けい九年四月十三日にぞゐさせ給ける。朱雀院





おとどはみまはれ給へるは、さるかたにおもおも  
 しくもてなさせ給、さらぬはさべう、おほんものわ  
 すれなどにて、つれづれにおぼしめさるゝ日などは、  
 おまへにめしいで、すぐろくうたせ、へんをつかせ  
 いしなどりをせさせて御らんじなどまでおは  
 しましければ、みなかたみになさけをかはしおかしう  
 なんおはしあひける。かくみかどのおほん心のめでた  
 ければ、ふくかぜもえだをならさずなどあればにや、  
 はるのはなも、にほひのどけく、秋のみみちも枝に  
 とどまり、いと心のどかなる御ありさまなり。たゞ今  
 の太政大臣にては、もとつねのおとどのみこ、四郎

たゞひらのおとどみかどのおほんをぢにて、世を  
 まつりごちておはす。そのおとどのみこ五人ぞおほ  
 しける。太郎はいまの左大臣にて、さねよりときこ  
 えて、をのゝみやといふところにすみ給、二郎は  
 右大臣にて、もろすけのおとど、九条といふところに  
 すみ給。三郎の御ありさまおぼつかなし。四郎、  
 もろうちどときこえける、大納言までぞなり給  
 ける。五郎師尹の左大臣ときこえて、こいでうと  
 いふところにすみ給。さればたゞいまは、このおほき  
 おとどの御子どもやがて、いとやむごとなきとのばら  
 にて、おはするなかに、九条のもろすけのおとど、

などして、御子むまれ給へるは、さるかたにおもおも  
 しくもてなさせ給、さらぬはさべう、おほんものわ  
 すれなどにて、つれづれにおぼしめさるゝ日などは、  
 おまへにめしいで、すぐろくうたせ、へんをつかせ  
 いしなどりをせさせて御らんじなどまでおは  
 しましければ、みなかたみになさけをかはしおかしう  
 なんおはしあひける。かくみかどのおほん心のめでた  
 ければ、ふくかぜもえだをならさずなどあればにや、  
 はるのはなも、にほひのどけく、秋のみみちも枝に  
 とどまり、いと心のどかなる御ありさまなり。たゞ今  
 の太政大臣にては、もとつねのおとどのみこ、四郎

たゞひらのおとどみかどのおほんをぢにて、世を  
 まつりごちておはす。そのおとどのみこ五人ぞおほ  
 しける。太郎はいまの左大臣にて、さねよりときこ  
 えて、をのゝみやといふところにすみ給、二郎は  
 右大臣にて、もろすけのおとど、九条といふところに  
 すみ給。三郎の御ありさまおぼつかなし。四郎、  
 もろうちどときこえける、大納言までぞなり給  
 ける。五郎師尹の左大臣ときこえて、こいでうと  
 いふところにすみ給。さればたゞいまは、このおほき  
 おとどの御子どもやがて、いとやむごとなきとのばら  
 にて、おはするなかに、九条のもろすけのおとど、

いとたりくわてしてわきまきこのころに  
 くつたやうにふんごうのふんごうにけり  
 みやの左大臣殿をたれりこまふんごうに  
 けりあんなまゝにたれりこまふんごうに  
 まゝにたれりこまふんごうにたれり  
 くらしくまゝにたれりこまふんごうに  
 のこまふんごうにたれりこまふんごうに  
 一人ははかなうなり給にけり。かくて、  
 あまたまいり給へる中に、九条のもろすけのお  
 とどのひめぎみ、あるがなかに一の女御にてさぶらひ  
 給。又、いまのみかどの御はらからの重明の式部卿官

ばちんじとの女御もわわわいふかやいふ  
 らの代明の女御もわわいふかやいふ  
 女御とてさぶらひ給。又、在衛のあぜち大納言のむす  
 め、あぜちの御息所とてさぶらひ給。小一でうの師尹  
 のおとどの御むすめ、いみじうつくしくて、宣耀  
 殿の女御ときこえさす。又、廣幡の中納言庶明の  
 おほんむすめ、廣幡のみやすどころとておはす。さて  
 も、このおほんかたがたみなみこむまれ給へるもあり。  
 みこむまれ給はぬみやすどころたちもあまた  
 さぶらひ給。まこと、もとかたみんぶきやうのむすめも  
 まいり給へり。としごろ、東宮もかくふたゝびうせ

いとたはしくおはして、あまたのきたのかたの御  
 はらに、おと二十一人、をんな六人ぞおはしける。をの  
 みやの左大臣殿は、おのこぎみ三人ばかりぞおはし  
 ける。をんなぎみもおはしけり、一所はみやばらの具  
 にておはす。さしつぎは、女御にておはしけり。つぎ  
 つぎさうさうにておはす。小一でうの師尹のおとどを  
 のこまふんごうにたれりこまふんごうに  
 一人ははかなうなり給にけり。かくて、にようごたち  
 あまたまいり給へる中に、九条のもろすけのお  
 とどのひめぎみ、あるがなかに一の女御にてさぶらひ  
 給。又、いまのみかどの御はらからの重明の式部卿官

のおほんむすめ、女御にておはす。又、おなじ御はら  
 からの代明のなかつかさの宮御むすめ、麗景殿  
 女御とてさぶらひ給。又、在衛のあぜち大納言のむす  
 め、あぜちの御息所とてさぶらひ給。小一でうの師尹  
 のおとどの御むすめ、いみじうつくしくて、宣耀  
 殿の女御ときこえさす。又、廣幡の中納言庶明の  
 おほんむすめ、廣幡のみやすどころとておはす。さて  
 も、このおほんかたがたみなみこむまれ給へるもあり。  
 みこむまれ給はぬみやすどころたちもあまた  
 さぶらひ給。まこと、もとかたみんぶきやうのむすめも  
 まいり給へり。としごろ、東宮もかくふたゝびうせ

わづらふとくもくわすせ給くわのあらまふ  
らひ給おほんかたがた、あやしう心もとなく、みこむ  
まれ給はざりける。程に、九条殿の女御、たゞにも  
おはしまさで、めでたしとのゝしりしかど、をんな  
みこにて、いとほいなきほどにたいらかにだに  
おはしまさでうせ給ぬるに、もとかたのみやす  
どころ、たゞならぬことよし申てまかで給ぬれ  
ば、もしをのこみこむまれ給へるものならば、又、なう  
めでたかるべきことに、よの人申おもひたるに、一乃  
みこむまれ給へるものかな。あなめでた、いみじと  
のゝしりたり。うちよりも御はかしよりはじめて、

さいのせりんたはくはなとてまてくわきさ  
くわももとの大納言いみじとおぼしたり。東宮  
はまじうふかりもまわらわのなまふかへり  
わがみこ、とうぐうにみあやまち給はんと、たのもし  
くおぼされけり。いみじうよの中にのゝしるほどに、  
九でうどのゝにようごたゞにもおはしまさずといふ  
こと、をのづから世にもりきゝゆれど、もとかたの  
大納言いで、さりともさきのこともありきなど、  
きゝおもひけり。おほいどのも九でう殿もいとうれ  
しうおほすほどに、うへは、世はともあれかうもあ  
れ、一のみこのおはするを、うれしくたのもしきことに

給ぬるに、たうぐうかくいさせ給はぬに、こゝらさぶ  
らひ給おほんかたがた、あやしう心もとなく、みこむ  
まれ給はざりける。程に、九条殿の女御、たゞにも  
おはしまさで、めでたしとのゝしりしかど、をんな  
みこにて、いとほいなきほどにたいらかにだに  
おはしまさでうせ給ぬるに、もとかたのみやす  
どころ、たゞならぬことよし申てまかで給ぬれ  
ば、もしをのこみこむまれ給へるものならば、又、なう  
めでたかるべきことに、よの人申おもひたるに、一乃  
みこむまれ給へるものかな。あなめでた、いみじと  
のゝしりたり。うちよりも御はかしよりはじめて、

れいのおほんさほうのことゝにて、もてなしき  
こえ給。もとかたの大納言いみじとおぼしたり。東宮  
はまだよにおはしまさぬほどなり、なにのゆへにか、  
わがみこ、とうぐうにみあやまち給はんと、たのもし  
くおぼされけり。いみじうよの中にのゝしるほどに、  
九でうどのゝにようごたゞにもおはしまさずといふ  
こと、をのづから世にもりきゝゆれど、もとかたの  
大納言いで、さりともさきのこともありきなど、  
きゝおもひけり。おほいどのも九でう殿もいとうれ  
しうおほすほどに、うへは、世はともあれかうもあ  
れ、一のみこのおはするを、うれしくたのもしきことに





宣耀殿女御、おと二六、八の宮むまれ給へりけれど、六の宮ははかなくなり給にけり。八のみやぞたいらかにておはしける。麗景殿の女御おと二七のみや、をんな六のみやむまれ給にけり。式部卿宮のようご、をんな四のみやぞうみたてまつり給へりける。廣幡みやすどころをんな五の宮むまれ給へり。あぜちのみやすどころ、おと二九のみやむまれ給などして、又、九条殿の女御、をんな七、九、十のみやなど、あまたさしつゞきむまれませ給て、なをこの御ありさまよにすぐれさせ給へり。かくいふほどに、おほかた

おとこみや九人、をんなみや十人ぞおはしける。このおほんなかにも、廣幡のみやす所ぞ、あやしうこゝろことにこゝろばせあるさまに、みかどおぼしめいたける。内よりかくなん  
あふさかもはてはゆきゝのせきもあらず  
たづねてとひこきなばかへさじといふうたをおなじやうにかゝせ給て、おほんかたがたにたてまつらせ給ひける。この御返事をかたがたさまさまに申させ給ひけるに、廣幡のみやすどころは、たきものをぞまいらせ給たりける。さればこそ、なをこゝろに見ゆれと、おぼし

宣耀殿女御、おと二六、八の宮むまれ給へりけれど、六の

宮ははかなくなり給にけり。八のみやぞたいら

かにておはしける。麗景殿の女御おと二七の

みや、をんな六のみやむまれ給にけり。式部卿宮の

ようご、をんな四のみやぞうみたてまつり給

へりける。廣幡みやすどころをんな五の宮

むまれ給へり。あぜちのみやすどころ、おと二九

のみやむまれ給などして、又、九条殿の女御、

をんな七、九、十のみやなど、あまたさしつゞき

むまれませ給て、なをこの御ありさまよに

すぐれさせ給へり。かくいふほどに、おほかた

おとこみや九人、をんなみや十人ぞおはしける。

このおほんなかにも、廣幡のみやす所ぞ、あや

しうこゝろことにこゝろばせあるさまに、みかど

おぼしめいたける。内よりかくなん

あふさかもはてはゆきゝのせきもあらず

たづねてとひこきなばかへさじといふうたをお

なじやうにかゝせ給て、おほんかたがたにたて

まつらせ給ひける。この御返事をかたがた

さまさまに申させ給ひけるに、廣幡のみやす

どころは、たきものをぞまいらせ給たりける。

さればこそ、なをこゝろに見ゆれと、おぼし





とのゝみやのやうは、歌をいみじくよませ給  
すきずきしき物から。おくぶかくわづらはしき  
おほんこゝろにぞおはしける。九条のおとどは、おいらか  
に、しるしらぬわかずこゝろひろくなどして、月  
ごろありてまいりたる人をも、たゞいま有つる  
やうに、けににくゝももてなさせ給はずなどし  
て、いとこゝろやすげにおぼしをきてためれば、  
おほとこの人々、おほくはこの九でう殿にぞあつまり  
ける。小一条の師尹のおとどは、しるしらぬほどのう  
とさむつまじさも、おぼしおぼさぬほどのけち  
めざやかになどして、くせぐせしうぞおぼしをき

てたりける。そのほどさままおかしうなん有ける。  
東宮、やうやうおよすけさせ給けるまゝに、いみじう  
うつくしうおはしますにつけても、九条殿おほん  
おぼえいみじうめでたし。又、四、五のみやさへおはし  
ますぞめでたきや。かゝる程に、てんとく二年  
七月廿七日にぞ、九条殿にようご、かさきにたゝせ  
給。ふちはらの安子と申て、いまは中宮ときこえ  
さす。中宮大夫には、みかどの御はらからの高明  
のしんわうときこえさせし、いまは源氏にて、例人  
になりておはするぞ、なり給にける。つきづきの  
みやづかさも、こゝろことにえらびなさせ給。九条殿

をのゝみやのおとどは、歌をいみじくよませ給  
すきずきしき物から。おくぶかくわづらはしき  
おほんこゝろにぞおはしける。九条のおとどは、おいらか  
に、しるしらぬわかずこゝろひろくなどして、月  
ごろありてまいりたる人をも、たゞいま有つる  
やうに、けににくゝももてなさせ給はずなどし  
て、いとこゝろやすげにおぼしをきてためれば、  
おほとこの人々、おほくはこの九でう殿にぞあつまり  
ける。小一条の師尹のおとどは、しるしらぬほどのう  
とさむつまじさも、おぼしおぼさぬほどのけち  
めざやかになどして、くせぐせしうぞおぼしをき

てたりける。そのほどさままおかしうなん有ける。  
東宮、やうやうおよすけさせ給けるまゝに、いみじう  
うつくしうおはしますにつけても、九条殿おほん  
おぼえいみじうめでたし。又、四、五のみやさへおはし  
ますぞめでたきや。かゝる程に、てんとく二年  
七月廿七日にぞ、九条殿にようご、かさきにたゝせ  
給。ふちはらの安子と申て、いまは中宮ときこえ  
さす。中宮大夫には、みかどの御はらからの高明  
のしんわうときこえさせし、いまは源氏にて、例人  
になりておはするぞ、なり給にける。つきづきの  
みやづかさも、こゝろことにえらびなさせ給。九条殿



けつふもくあけりまをばのまのたの  
 せむんじむけりしむきくそむく今ゆ  
 けりしむきくそむく今ゆ  
 まつ海濱をみよとやわなみり  
 うれがうのよけりしむきくそむく  
 いりしむきくそむく今ゆ  
 くろくはむきくそむく今ゆ  
 もみりしむきくそむく今ゆ  
 とりみりしむきくそむく今ゆ  
 けりしむきくそむく今ゆ  
 せむんじむけりしむきくそむく今ゆ

給へるぞかし。それにも、このをの宮のおとどのおほんうたおほくいらためり。たゞし古今には、つらゆき、じよいとおかしうつくりてつかうまつれり。後撰集にもさやうにやとおぼしめしけれども、かれはそのときのつらゆきこのかたの上手にて、いにしへをひきいまをおもひ、行末をかねておもしろくつくりたるに、いまはさやうのことにたへたる人なくて、くちおしくおぼしめしけり。このをの宮みやのおとどの二郎二所のこりておはしつるを三郎、右衛門督までなり給へりつるも、うせ給にければ、いまは二郎よりたゞときこゆるのみぞおはすめる。まだおほんくらあいとあさし。うゑもんのせうのわかうて上達部になり給へりしが、かくてやみ給にしかば、それにをぢてすがすがしくもなしあげたてまつり給はで。右衛門督のみこどもあまたおはしける中にも、三郎をぞ、おほぢおとどわがみこにし給て、さねすけとつけ給へりける。あつとしの少将のきみも、おのこをんなごあまたたまへりけるを、このおほぢおとどぞ、よろづに、はぐみ給ける。九条殿のきさきの御はらからの中のきみは、しげあきらの式部卿のみやのきたのかたにてぞおは



物とてわづらひけりしは、さききき  
まはらせ給べきにさだめありて、こと人々、たゞ  
いまはおぼしとゞまりにけり。式部卿宮のきたの  
かたは、うちわたりのさるべきおりふしのおかし  
きことみには、みやづかならずまいり給けるを、うへ  
はつかに御覧じて、人しれず、いかでいかでとおぼ  
しめして、きさきにせちにきこえませ給ければ、  
こゝろくるしうて、しらぬがほにて二三どはたいめ  
せさせたまつらせ給けるを、うへはつかにあかず  
のみおぼしめして、つねに、「なをなを」ときこえさせ

給ければ、わざとむかへたまつり給ひけれど、  
あまりはえものせさせ給はりざりけるほどに、  
みかどさるべき女房をかよはせさせ給て、しのびて  
まぎれ給つゝまいり給。又、つくもどころにさる  
べき御てうどもまでこゝろざしせさせ給ける  
ことを、をのづからたびたびになりて、きさきのみや  
もりかかせ給て、いとものしき御けしきになり  
にければ、うへもつゝましうおぼしめして、かのきた  
のかたもいとおそろしうおぼしめされて、そのこと  
とゞまりにけり。かのみやのきたのかたは、おほん  
かたちもこゝろもおかしういまめかしうおぼしける、

給しを、さやうにおぼしためるは、きさきに

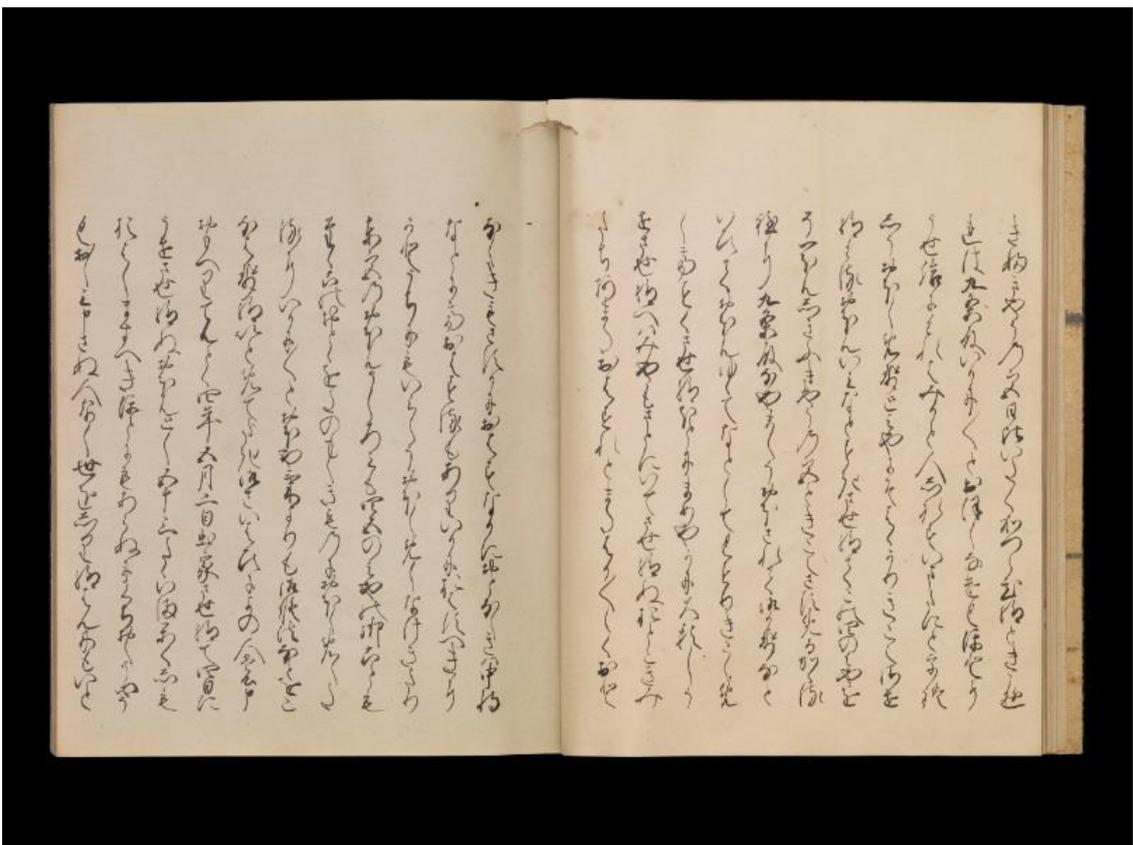
すへたてまつらんの御ほいなるべし。さればそのみや  
まいらせ給べきにさだめありて、こと人々、たゞ  
いまはおぼしとゞまりにけり。式部卿宮のきたの  
かたは、うちわたりのさるべきおりふしのおかし  
きことみには、みやづかならずまいり給けるを、うへ  
はつかに御覧じて、人しれず、いかでいかでとおぼ  
しめして、きさきにせちにきこえませ給ければ、  
こゝろくるしうて、しらぬがほにて二三どはたいめ  
せさせたまつらせ給けるを、うへはつかにあかず  
のみおぼしめして、つねに、「なをなを」ときこえさせ

給ければ、わざとむかへたまつり給ひけれど、  
あまりはえものせさせ給はりざりけるほどに、  
みかどさるべき女房をかよはせさせ給て、しのびて  
まぎれ給つゝまいり給。又、つくもどころにさる  
べき御てうどもまでこゝろざしせさせ給ける  
ことを、をのづからたびたびになりて、きさきのみや  
もりかかせ給て、いとものしき御けしきになり  
にければ、うへもつゝましうおぼしめして、かのきた  
のかたもいとおそろしうおぼしめされて、そのこと  
とゞまりにけり。かのみやのきたのかたは、おほん  
かたちもこゝろもおかしういまめかしうおぼしける、

いろめかしうさへおはしければ、かゝることはある  
 なるべし。みかど人しれずものおもひにおぼししみ  
 だる。かゝる程に、きさきのみやもみかども、四のみや  
 をかぎりなきものにおもひきこえさせ給ければ、  
 そのけしきしたがひて、よろづの殿上人、上達部、  
 なびきつかうまつりてもてはやしたてまつり  
 給ほどに、やうやう十二三ばかりにおはしませば、おほん  
 げんぶくのことおぼしいそがせ給。おほんむすめも  
 たまへる上達部は、いみじうけしきばみきこえ  
 給に、みやの大夫ときこゆる人、源氏の左大将えも  
 いはずかしづき給ひとりむすめを、さやうにと  
 ほのめかしきこえ給ければ、みかどもみやもおほん  
 けしきさやうにおぼしければ、よろこびてよろ  
 づしとゝのへさせ給て、やがてそのよまゐり給ふ。  
 れいのみやたちは、わがさとおはしそむることこそ  
 つねのことなれ、これは、女御、更衣のやうに、やがて  
 うちにおはしますに、まいらせたてまつり給べき  
 さだめあれば、れいの女御、更衣のまいりはさること  
 なり、これはいとめづらかにさまかはりいまめか  
 して、おほんげんぶくのよやがてまいり給。みかど、  
 きさきの御よめあつかひのほど、いとおかしく  
 なん見えさせ給けり。かゝる程に、しげあきらし

いろめかしうさへおはしければ、かゝることはある  
 なるべし。みかど人しれずものおもひにおぼししみ  
 だる。かゝる程に、きさきのみやもみかども、四のみや  
 をかぎりなきものにおもひきこえさせ給ければ、  
 そのけしきしたがひて、よろづの殿上人、上達部、  
 なびきつかうまつりてもてはやしたてまつり  
 給ほどに、やうやう十二三ばかりにおはしませば、おほん  
 げんぶくのことおぼしいそがせ給。おほんむすめも  
 たまへる上達部は、いみじうけしきばみきこえ  
 給に、みやの大夫ときこゆる人、源氏の左大将えも  
 いはずかしづき給ひとりむすめを、さやうにと  
 ほのめかしきこえ給ければ、みかどもみやもおほん  
 けしきさやうにおぼしければ、よろこびてよろ  
 づしとゝのへさせ給て、やがてそのよまゐり給ふ。  
 れいのみやたちは、わがさとおはしそむることこそ  
 つねのことなれ、これは、女御、更衣のやうに、やがて  
 うちにおはしますに、まいらせたてまつり給べき  
 さだめあれば、れいの女御、更衣のまいりはさること  
 なり、これはいとめづらかにさまかはりいまめか  
 して、おほんげんぶくのよやがてまいり給。みかど、  
 きさきの御よめあつかひのほど、いとおかしく  
 なん見えさせ給けり。かゝる程に、しげあきらし

ほのめかしきこえ給ければ、みかどもみやもおほん  
 けしきさやうにおぼしければ、よろこびてよろ  
 づしとゝのへさせ給て、やがてそのよまゐり給ふ。  
 れいのみやたちは、わがさとおはしそむることこそ  
 つねのことなれ、これは、女御、更衣のやうに、やがて  
 うちにおはしますに、まいらせたてまつり給べき  
 さだめあれば、れいの女御、更衣のまいりはさること  
 なり、これはいとめづらかにさまかはりいまめか  
 して、おほんげんぶくのよやがてまいり給。みかど、  
 きさきの御よめあつかひのほど、いとおかしく  
 なん見えさせ給けり。かゝる程に、しげあきらし

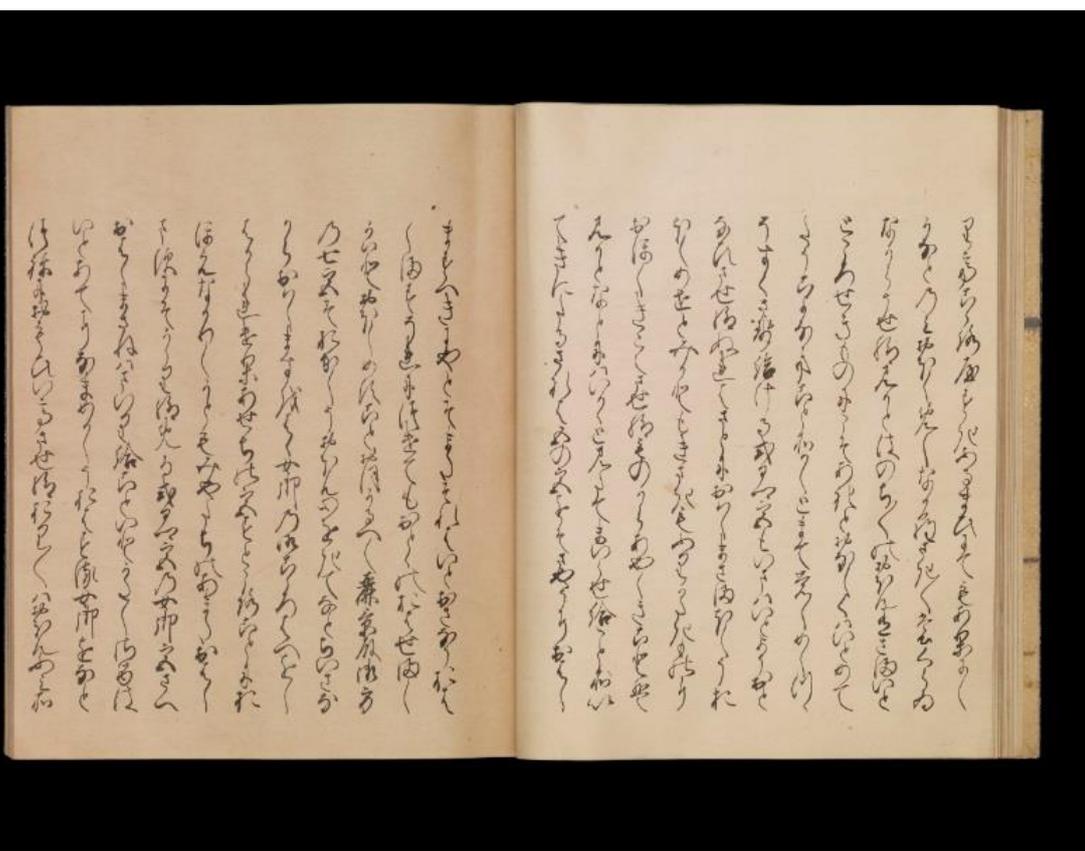


ま物まやうの宮、日頃いたくわづらひ給ときこゆ  
れば、九条殿いかにいかにおぼしなげくほどに、  
うせ給にければ、みかど、人しれず、いまだにとうれ  
しうおぼしめせど、みやにぞはざかりきこえさせ  
給ける。おほんいみなどすぎさせ給て、この四のみやを  
ぞ一ぼんしきぶきやうの宮ときこえさせ給る。かゝる  
程に、九条殿なやましうおぼされて、御かせなど  
いひて、おほんゆゝでなどして、くすりきこしめ  
してすぐさせ給ほどに、まめやかにくるしう  
せさせ給へば、みやもさといでさせ給ぬ。おとこぎみ  
たちあまたおはすれど、まだはかばかしくおと

なしきもさすがにおはず。なかにおとなしきは、中将  
などにておはするもあり。いかにおはすべきに  
かと、うちにもいみじうおぼしめしなげきたり。  
東宮のおほんうしろみも、四、五のみやの御ことも、  
たゞこのおとゞをたのもしきものにおぼしめした  
るに、いかにいかにとおほやけよりも御修法などをこ  
なはせ給いとめでたき御さいはひによの人も申  
おもへり。てんとく四年五月二日出家させ給て、四日に  
うせさせ給ぬ。おほんとし五十三、たゞいまかくしも  
おはしますべきほどにもあらぬにくちおしう心う  
く、おしみ申さぬ人なし。世をしり給はんにもいと

なしきもさすがにおはず。なかにおとなしきは、中将  
などにておはするもあり。いかにおはすべきに  
かと、うちにもいみじうおぼしめしなげきたり。  
東宮のおほんうしろみも、四、五のみやの御ことも、  
たゞこのおとゞをたのもしきものにおぼしめした  
るに、いかにいかにとおほやけよりも御修法などをこ  
なはせ給いとめでたき御さいはひによの人も申  
おもへり。てんとく四年五月二日出家させ給て、四日に  
うせさせ給ぬ。おほんとし五十三、たゞいまかくしも  
おはしますべきほどにもあらぬにくちおしう心う  
く、おしみ申さぬ人なし。世をしり給はんにもいと





りてこゝろやすきふるまひにてもあかにし

がなとのみおぼしめしながら、さきさきもくらゐ

ながらうせ給みかどは、のちのちのおほん有さまいと

とゝろせきものにこそあれとおなじくは、いとめで

たうこよなきことぞかしとまで覺しめしつゝ

ぞ、すぐさせ給ける。式部卿宮も、いまいとようおと

なびさせ給ぬれば、さとおはしまさまほしうお

ぼしめせど、みかどもきさきもふりがたきものに

おぼしきこえさせ給ものから、あやしきことは、

みかどなどにはいかゞと、みたてまいらせ給ことぞい

できにたる。されば五の宮をぞ、さやうにおはし

ますべきにやとぞ。まだそれはいとおさなうおは

します。それにつけても、おとゞのおはせまし

かばと、おぼしめすことおほかるべし。麗景殿御方

の七宮ぞ、おかしう、おほん心をきてなど、ちいさな

がらおはしますを、はゞ女御の御こゝろばへをし

はかられけり。あせぢの宮すどころ、ことにお

ぼえなかりしかども、みやたちのあまたおはし

ますにぞかゝり給める。式部卿宮の女御宮さへ

おはしまさねば、まいり給こといとかたし。さるは、

いとあてになまめかしうおはする女御をなど、

つねにおもひいでさせ給おりおは、おほんふみぞ

うさぎもけりもあつた御もまたたのまぬより  
さきもわたりもさきもわたりもさきもわたりも  
うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも  
うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも  
うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも  
うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも

うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも  
うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも  
うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも  
うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも  
うさぎもわたりもわたりもわたりもわたりも  
さきもわたりもわたりもわたりもわたりも

たえざりける。かゝる程に、きさいの宮、ひごろ  
たゞにもおはしまさぬを、いかにとおぼしめさるゝ  
に、あやしう、なやましうのみ、つねよりもくるしう  
おぼさるれば、いかなることにかと、わがおほん心ち  
もおぼしめさるれば、七檀の御修法、長日御修法、  
おほやけがた、みやがたとをこなはせ給。ふだんの  
御読経などをこなはせ給しありて、おほんこゝ  
ちさはやがせ給などすれば、いとうれしきことに  
おぼしめせば、又おなじことにくるしうせさせ給  
ひなどして、月日すぎもていく程に、さとにいで  
させ給を「なおなおかくて」と申させ給へど、「それもおそ  
ろしきことなり」とていさせ給て、いよいよおほん  
いのりひまなし。おほくのみやたちのおはしま  
せば、うへ、いかにとのみ、しづ心なくおぼしまどふも、  
げにとのみ見えさせ給。うちには、よろづにおほん  
心をやり、おかしきおほんあそびも、このおほんなや  
みによりおぼしたえて、いかさまにと覺したれ  
ば、をのゝ宮おとゞ「いとおそろしう、なをおほん心  
をやりておはしましならひて、いたくしづませ  
給へるを、こゝろくるしきおほんことなり」とて、又、お  
ほんいのりなどよろづにつかうまつらせ給。「この  
宮かくておはしませばこそ、よろづとゝのほりて、

おほんかたがたもころのどかにもてな  
されておはすれ。もしともかくもおはしま  
さば、いかにいかにみぐるしきことおほからん」と人々も  
いひおもひ、おほんかたがたもいみじくおぼしなげ  
くべし。かゝる程におほんなやみ、なをおどろおどろ  
しうなりまさらせ給へば、うちにもとにもこのお  
ほんことをおぼしなげくに、うちより御つかひ  
ひまもなし。式部卿宮、このおりさへやとて、やがて  
いでさせ給ひにしかば、うへさまさまに、さうざうしく  
おぼつかなきことどもおほくおぼしめす。女官  
たちは、「なをしぼし」とてとどめたてまつらせ給

へり。五のみやをも、「おほんものゝけおそろし」とて、  
とどめたてまつらせ給つ。かへすがへす、いかなるべ  
きおほん心ちにかと、おぼしめさる。みやたちをば、  
さうざうしくおぼしめさるらんとて、おほん心  
のいとまなけれど、うへわたらせ給ひて、よろづに  
ころしらひきこえさせ給も、かつは、いかゞとおぼし  
つゞけても、おほんなみだこぼれさせ給へば、よくし  
のぼせ給へど、おほんころろさはぎさせ給。たゞ  
にもあらぬにかくおはしますことを、よろづより  
もあやうく大事におぼしめさるゝに、おほん心  
ちひさしうなれば、いとよはくならせ給て、ともすれ

かたへのおほんかたがたもころのどかにもてな  
されておはすれ。もしともかくもおはしま  
さば、いかにいかにみぐるしきことおほからん」と人々も  
いひおもひ、おほんかたがたもいみじくおぼしなげ  
くべし。かゝる程におほんなやみ、なをおどろおどろ  
しうなりまさらせ給へば、うちにもとにもこのお  
ほんことをおぼしなげくに、うちより御つかひ  
ひまもなし。式部卿宮、このおりさへやとて、やがて  
いでさせ給ひにしかば、うへさまさまに、さうざうしく  
おぼつかなきことどもおほくおぼしめす。女官  
たちは、「なをしぼし」とてとどめたてまつらせ給  
へり。五のみやをも、「おほんものゝけおそろし」とて、  
とどめたてまつらせ給つ。かへすがへす、いかなるべ  
きおほん心ちにかと、おぼしめさる。みやたちをば、  
さうざうしくおぼしめさるらんとて、おほん心  
のいとまなけれど、うへわたらせ給ひて、よろづに  
ころしらひきこえさせ給も、かつは、いかゞとおぼし  
つゞけても、おほんなみだこぼれさせ給へば、よくし  
のぼせ給へど、おほんころろさはぎさせ給。たゞ  
にもあらぬにかくおはしますことを、よろづより  
もあやうく大事におぼしめさるゝに、おほん心  
ちひさしうなれば、いとよはくならせ給て、ともすれ



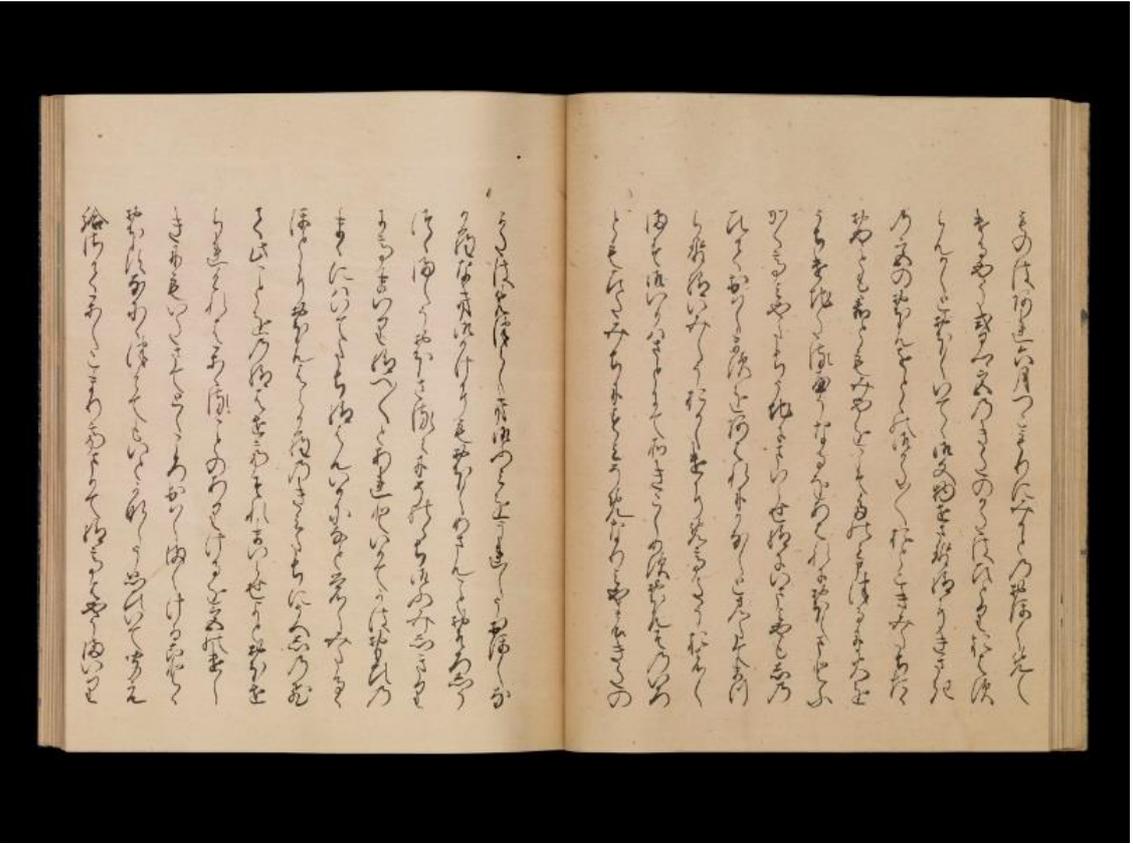
らとほ、癸卯年四月廿九日、いへばをろかなりや、  
おもひやるべし。うちのみやたちもよべぞいでさせ  
給へる。このたびのみや、をんなにぞおはしましける。  
みやたちまだおさなくおはしませば、なにとも覺  
したるまじけれど、おほかたのひゞきにいみじう  
なかせ給。式部卿宮は、ふしまろびなきまどはせ給  
もことほりにいみじう、内にもきこしめして、すべ  
てなにごともおぼえさせ給はず、御二丞をだにおしま  
せ給はず、ゆゝしきまで見えさせ給おほんありさま  
なり。東宮もおほんものゝけのこのみやにまいりた  
れば、れいのおほん心ちにおはしませば、いといみ

じうかなしきことにまどはせ給もあはれに、見たて  
まつる人みななみだどゞめがたし。あはれなり  
ともをろかなり。さてやはとて、いまみやは、侍従の  
命ぶかねてもしかおぼしゝことなれば、やがてつ  
かうまつる。「あはれ、れいのやうにたいらかにおはし  
まさましかば、このたびはこゝろことにいかにめで  
たからまし」といひつゞけてとのばら、女房たち  
なきどよみたる、ことほりにいみじきおほんこと  
なりかし。かくてのみやはおはしまさんとて、二日あり  
て、とかくしたてまつらんとおぼしをきてたるに  
も、ぎしきありさま、あはれにかなしういみじき

ことほは、癸卯年四月廿九日、いへばをろかなりや、  
おもひやるべし。うちのみやたちもよべぞいでさせ  
給へる。このたびのみや、をんなにぞおはしましける。  
みやたちまだおさなくおはしませば、なにとも覺  
したるまじけれど、おほかたのひゞきにいみじう  
なかせ給。式部卿宮は、ふしまろびなきまどはせ給  
もことほりにいみじう、内にもきこしめして、すべ  
てなにごともおぼえさせ給はず、御二丞をだにおしま  
せ給はず、ゆゝしきまで見えさせ給おほんありさま  
なり。東宮もおほんものゝけのこのみやにまいりた  
れば、れいのおほん心ちにおはしませば、いといみ  
じうかなしきことにまどはせ給もあはれに、見たて  
まつる人みななみだどゞめがたし。あはれなり  
ともをろかなり。さてやはとて、いまみやは、侍従の  
命ぶかねてもしかおぼしゝことなれば、やがてつ  
かうまつる。「あはれ、れいのやうにたいらかにおはし  
まさましかば、このたびはこゝろことにいかにめで  
たからまし」といひつゞけてとのばら、女房たち  
なきどよみたる、ことほりにいみじきおほんこと  
なりかし。かくてのみやはおはしまさんとて、二日あり  
て、とかくしたてまつらんとおぼしをきてたるに  
も、ぎしきありさま、あはれにかなしういみじき







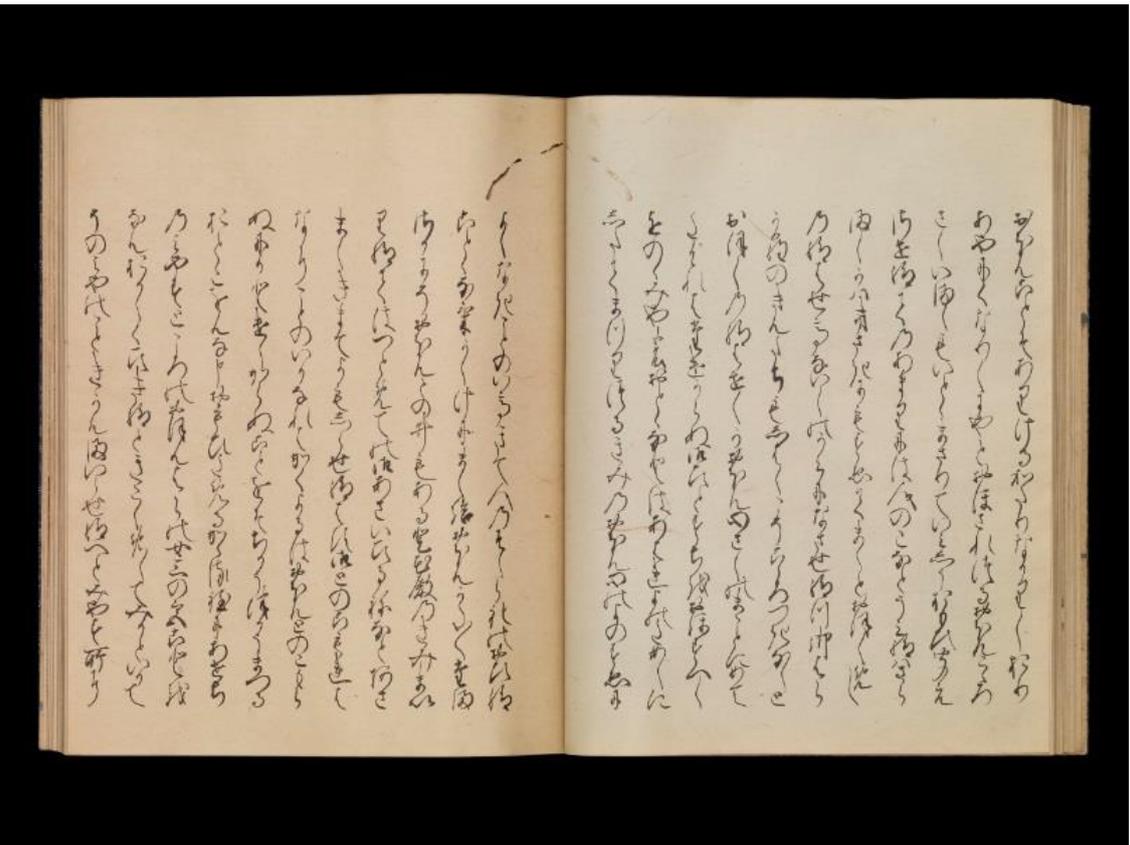
そのほりまの月つまらぬかすの世居りて  
 きもあやふくまのまのころはひんかしく  
 んんていそりてはま物をまはゆりまき  
 りぬのまわんていひひりてなこまき  
 まわももあやふくまのまはひんかす  
 うらまはひんかすのまはひんかす  
 びりまのまはひんかすのまはひんかす  
 ひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 らまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 ぬまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 うまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす

うまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 らまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 ひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 ぬまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 うまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 らまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 ひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 ぬまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 うまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 らまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 ひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 ぬまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす  
 うまはひんかすのまはひんかすのまはひんかす

ものはあれ、六月つごもりにみかどのおぼしめし  
 けるやう、式部卿宮のきたのかたはひとりおはす  
 らんかしとおぼしいで、御文物せさせ給に、きさき  
 の宮のおほんをとどの御かたがたおとこぎみたち、たど  
 おやとも君ともみやをこそたのみ申つるに、火を  
 うちけちたるやうなるを、あはれにおぼしまどふ。  
 かくてみやたちうちまいらせ給に、いまみやもしの  
 びておはしますを、あはれにかなしと見たてまつ  
 らせ給。いみじうおかしげにめでたうおはし  
 ます。御いかはさとにぞきこしめす、おほん衣のいろ  
 ども、ひたみちにすみぞめなり。みやのきたの

かたは、めづらしき御ふみをうれしうおごしな  
 がら、なき御かげにもおぼしめさんこと、おそらしう  
 つましうおぼさるゝに、そのゝち御ふみしきり  
 にて、「まいり給へまいり給へ」とあれど、いかでかはおもひの  
 まゝにはいでたち給はん、いかになど覚しみだるゝ  
 ほどに、おほんはらからのきみだちに、うへしのび  
 て、此ことをの給はせて、「それまいらせよ」とおほせ  
 られければ、かゝることのありけるを、宮のけし  
 きにもいさで、としごろおはしましけることゝ、  
 おぼすなにゝつけても、いとかなしう思ひいで聞え  
 給。さてかしこまりてまかで給て、「はやうまいり



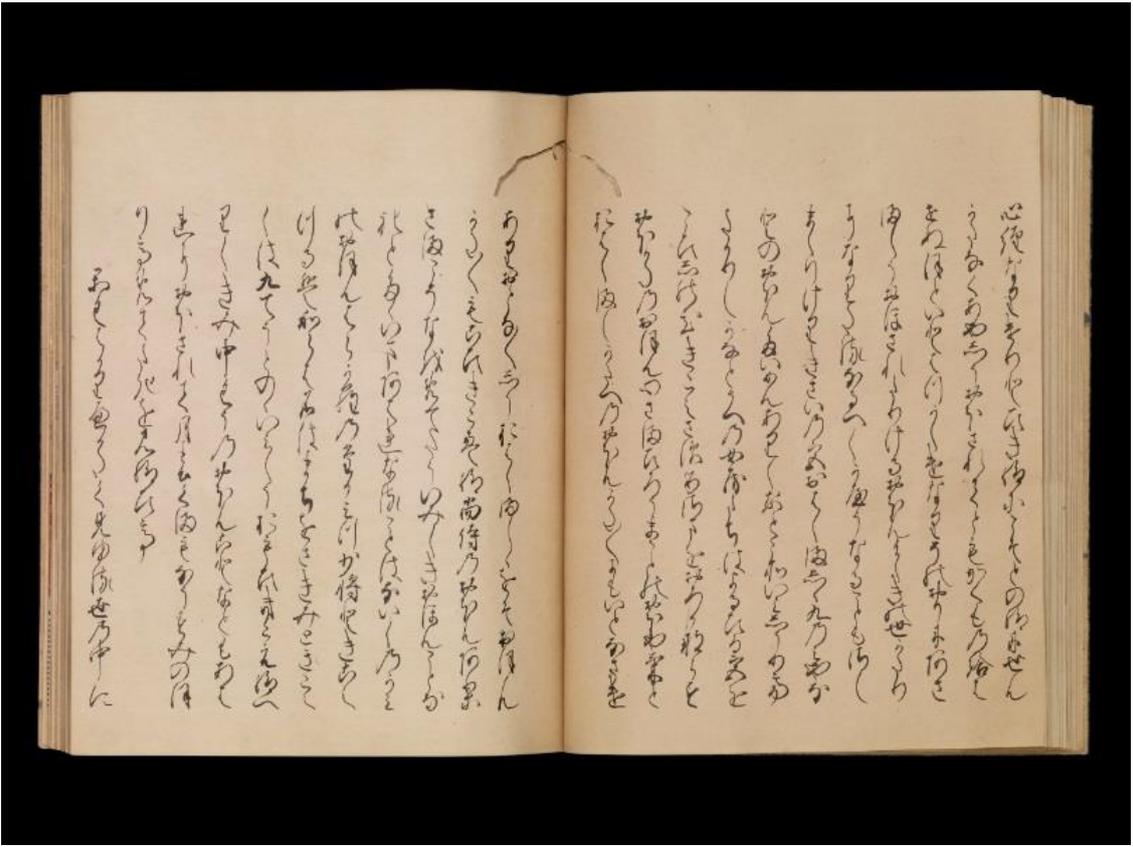


おぼんことぞありける。わたりなかりしおり、  
あやにくなりしにやと、おぼされつるおほんこころ  
ざし、いましもいとまさりて、いみじうおもひ聞え  
させ給てのあまりには、「人のこなどうみ給はざら  
ましかば、きさきにもすゑてまし」とおぼしめし  
の給はせて、ないしのかみになさせ給つ。御はら  
からのきんだちも、しばしこそ「こころづきなし」と  
おぼしの給はせしか、おほん心ざしのまことにめで  
たければ、たけからぬ御ひとすぢをおぼすべし。  
をのゝみやのおとどなどは、「あはれ、よのためしに  
したてまつりつるきみのおほん心の、よのすゑに

よしなきことのできて、人のそしられのおひ給  
こと」ゝ、なげかしげにまし給。おほんかたがたたま  
さかにぞおほんとのいもある。登花殿のきみまい  
り給ては、つとめての御あさい、ひるねなど、あさ  
ましきまでよもしらせ給はず御とのごもれば、  
「なにごとのいかなれば、かくよるはおほんのごもら  
ぬにか」と、けしからぬことをぞ、ちかうつかうまつる  
おとこをんな申おもひためる。かゝる程に、あせぢ  
のみやすどころのおほんはらの女三の宮、ことを  
なんおかしくひき給ときこしめして、みかど、「いかで  
そのみやのこときかん。まいらせ給へ」とみやす所に

おぼんことぞありける。わたりなかりしおり、  
あやにくなりしにやと、おぼされつるおほんこころ  
ざし、いましもいとまさりて、いみじうおもひ聞え  
させ給てのあまりには、「人のこなどうみ給はざら  
ましかば、きさきにもすゑてまし」とおぼしめし  
の給はせて、ないしのかみになさせ給つ。御はら  
からのきんだちも、しばしこそ「こころづきなし」と  
おぼしの給はせしか、おほん心ざしのまことにめで  
たければ、たけからぬ御ひとすぢをおぼすべし。  
をのゝみやのおとどなどは、「あはれ、よのためしに  
したてまつりつるきみのおほん心の、よのすゑに  
よしなきことのできて、人のそしられのおひ給  
こと」ゝ、なげかしげにまし給。おほんかたがたたま  
さかにぞおほんとのいもある。登花殿のきみまい  
り給ては、つとめての御あさい、ひるねなど、あさ  
ましきまでよもしらせ給はず御とのごもれば、  
「なにごとのいかなれば、かくよるはおほんのごもら  
ぬにか」と、けしからぬことをぞ、ちかうつかうまつる  
おとこをんな申おもひためる。かゝる程に、あせぢ  
のみやすどころのおほんはらの女三の宮、ことを  
なんおかしくひき給ときこしめして、みかど、「いかで  
そのみやのこときかん。まいらせ給へ」とみやす所に



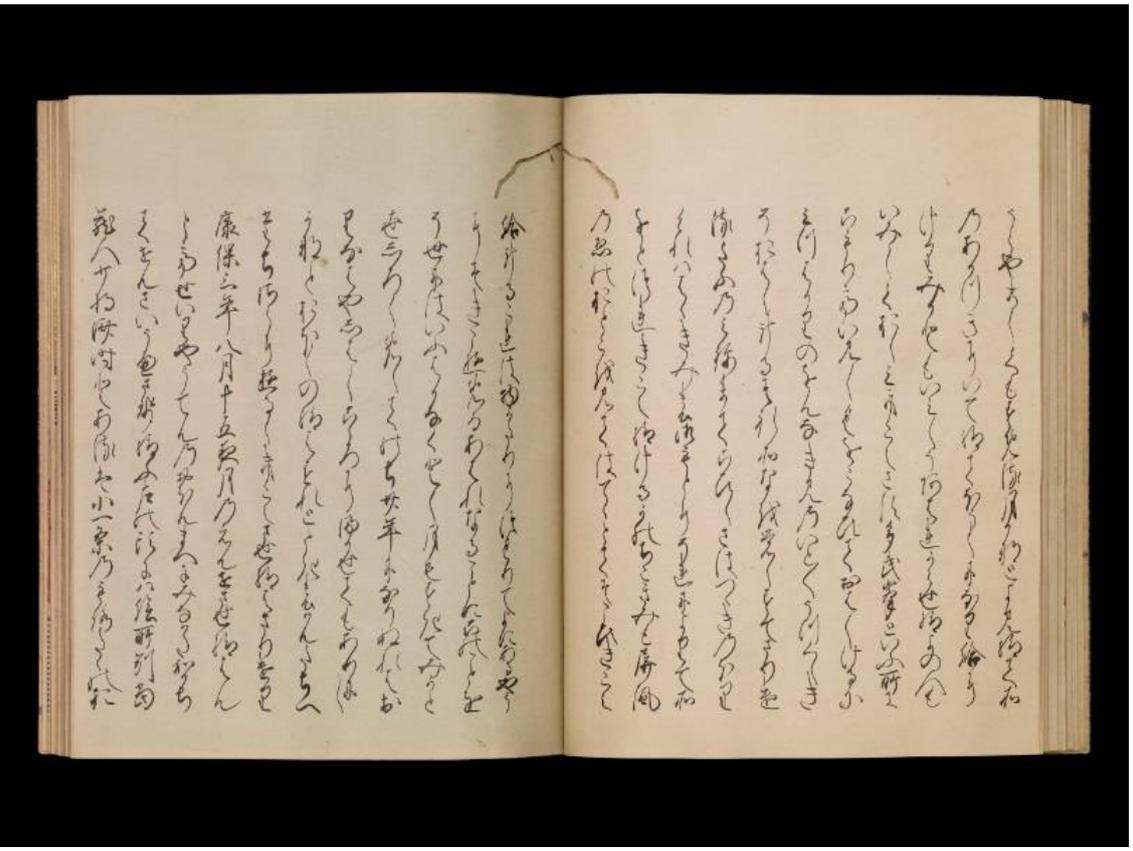


心経なりけり』とひき給にこそ」との給に、せん  
 かたなくあやしうおぼされて、ともかくもの給は  
 せぬほど、いとほづかしげなり。そのおりにあさ  
 ましうおぼされたりけるおほんけしきの、世がたり  
 になりたるなるべし。かやうなることもさし  
 まじりけり。きさいの宮おはしまし、九のみやな  
 どのおほんたいめんありしなどこそ、いみじうめ  
 たかりしかなど、うへの女房たちは、よるひる宮を  
 こひしのびきこえさするさまをおろかならず。  
 おほかたのおほん心ざまひろう、まことのおほやけと  
 おはしまし、かたへのおほんかたがたにもいとなさけ  
 なくぬ。

あり、おとなおとなしうおはしまし、をぞ、おほん  
 かたがたもこひきこえ給。尚侍のおほんあり  
 さまこそ、なをめでたういみじきおほんことな  
 れど、たゞいまあはれなることは、ないしのかみ  
 のおほんはらからのたかみつ少将ときこえ  
 つるは、わらは名はまちをさきみときこえ  
 しは、九でうどのいみじうおもひきこえ給へ  
 りしきみ、中ぐうのおほんことなどもあは  
 れにおぼされて、月のくまもなうすみのぼ  
 りてめでたきを見給ひて、  
 おくばかりへがたく見ゆる世の中に

心経なりけり』とひき給にこそ」との給に、せん  
 かたなくあやしうおぼされて、ともかくもの給は  
 せぬほど、いとほづかしげなり。そのおりにあさ  
 ましうおぼされたりけるおほんけしきの、世がたり  
 になりたるなるべし。かやうなることもさし  
 まじりけり。きさいの宮おはしまし、九のみやな  
 どのおほんたいめんありしなどこそ、いみじうめ  
 たかりしかなど、うへの女房たちは、よるひる宮を  
 こひしのびきこえさするさまをおろかならず。  
 おほかたのおほん心ざまひろう、まことのおほやけと  
 おはしまし、かたへのおほんかたがたにもいとなさけ  
 なくぬ。

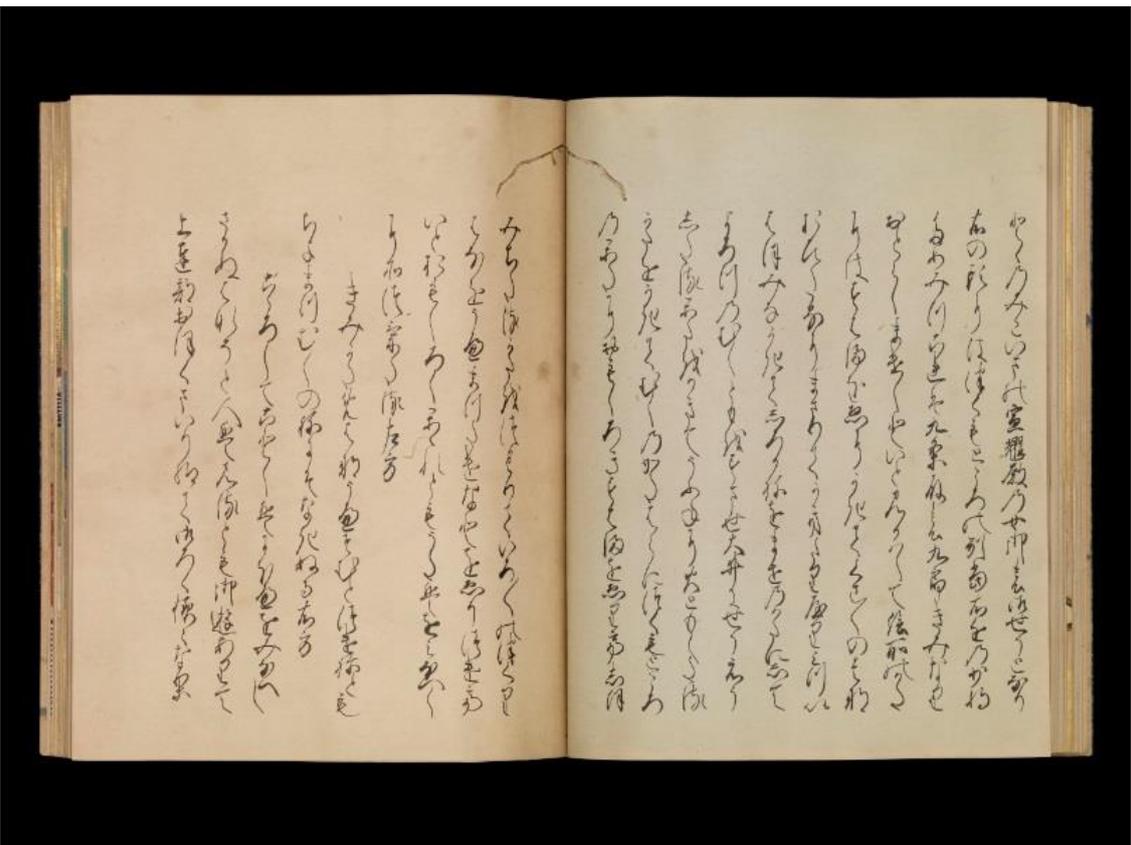
あり、おとなおとなしうおはしまし、をぞ、おほん  
 かたがたもこひきこえ給。尚侍のおほんあり  
 さまこそ、なをめでたういみじきおほんことな  
 れど、たゞいまあはれなることは、ないしのかみ  
 のおほんはらからのたかみつ少将ときこえ  
 つるは、わらは名はまちをさきみときこえ  
 しは、九でうどのいみじうおもひきこえ給へ  
 りしきみ、中ぐうのおほんことなどもあは  
 れにおぼされて、月のくまもなうすみのぼ  
 りてめでたきを見給ひて、  
 おくばかりへがたく見ゆる世の中に



うらやましくもすめる月かなとよみ給て、そ  
 のあかつきにい給て、ほうしになり給に  
 けり。みかどもいみじうあはれがらせ給、よの人も  
 いみじくおしみきこえさす。多武峰といふ所に  
 こもりて、いみじくをこなひておはしけるに、  
 三つばかりのをんなぎみのいと、うつくしき  
 ぞおはしける、それぞなを覚しすてざりけ  
 る。たふのみねまでこひしさはつゞきのぼり  
 ければ、はゞぎみの御もとに、それによりてぞ  
 をとづれきこえ給ける。かのちごぎみも、屏風  
 のゑのおとこを見ては、てゝとてぞこひきこえ

給ける。これは物がたりにつくりて、よにあるやう  
 にぞきこゆめる。あはれなることに、このことを  
 ぞ世にはいふ。はかなくとし月もすぎて、みかど、  
 世しろしめしてのち、廿年になりぬれば、「お  
 りなばや。しばしこゝろにまかせてもありにし  
 がな」とおぼしの給はすれど、ときのかんだちべ  
 たち、さらにゆるしきこえさせ給はざりけり。  
 康保三年八月十五日夜、月のえんせさせ給はん  
 とて、せいりやうでんのおほんまへに、みなかたわかち  
 てせんざいうへさせ給ふ。左の頭には、絵所別当  
 藏人サね俊内史の御名を小一条のもろたゞのお

うらやましくもすめる月かなとよみ給て、そ  
 のあかつきにい給て、ほうしになり給に  
 けり。みかどもいみじうあはれがらせ給、よの人も  
 いみじくおしみきこえさす。多武峰といふ所に  
 こもりて、いみじくをこなひておはしけるに、  
 三つばかりのをんなぎみのいと、うつくしき  
 ぞおはしける、それぞなを覚しすてざりけ  
 る。たふのみねまでこひしさはつゞきのぼり  
 ければ、はゞぎみの御もとに、それによりてぞ  
 をとづれきこえ給ける。かのちごぎみも、屏風  
 のゑのおとこを見ては、てゝとてぞこひきこえ  
 給ける。これは物がたりにつくりて、よにあるやう  
 にぞきこゆめる。あはれなることに、このことを  
 ぞ世にはいふ。はかなくとし月もすぎて、みかど、  
 世しろしめしてのち、廿年になりぬれば、「お  
 りなばや。しばしこゝろにまかせてもありにし  
 がな」とおぼしの給はすれど、ときのかんだちべ  
 たち、さらにゆるしきこえさせ給はざりけり。  
 康保三年八月十五日夜、月のえんせさせ給はん  
 とて、せいりやうでんのおほんまへに、みなかたわかち  
 てせんざいうへさせ給ふ。左の頭には、絵所別当  
 藏人少将濟時とあるは、小一条のもろたゞのお



とどのみこ、いまの宣耀殿の女御の御せうとなり。

右の頭には、つくもどころの別当右近の少将

ためみつ、これは九条殿の九郎ぎみなり。

おとらじまけじといどみかはして、絵所のかた

にはすはまを忍にかきて、くさぐさのはな、

おひたるにまさりてかきたり。やりみづ、い

はほみなかきて、しろがねをませのかたにして、

よろづのむしどもをすませ、大井にせうえう

したるかたをかきて、うぶねに火ともしたる

かたをかきて、むしのかたはらにつくもどころ

のかたに、おもしろきすはまを忍りて、しほ

みちたるかたをつくりて、いろいろのつくり

ばなをうへ、まつたけなどを忍りつけて、

いとおもしろし。かゝれども、うたはをみなへし

にぞつけたる。左方、

きみがためはなうへそむとつげねども

ちよまつむしのねにぞなきぬる。右方、

こゝろしてことしはにほへをみなへし

さかぬはなぞと人はみるとも。御遊ありて、

上達部おほくまいり給て、御ろく様々なり。









みろくもえりてせ給ふはむかしよりみろくわたり  
けりみかどのおほんとし十八にぞおはしまし  
ける。このみかどたゞせ給おなじ日、女御もきさ  
きにたゞせ給て、中宮と申。昌子内親王とぞ申  
つるか。朱雀院の御ころをきてを、ほいかな  
はせ給へるもいとめでたし。中宮のたいふに  
は、宰相ともなり給ぬ。東宮大夫には、中納言  
師氏、傳には小一でうのおとゞなり給ぬ。みな九条  
殿のおほんはらからのとのばらにおはすかし。  
たゞし九条殿の君たちは、まだおほんくらゐど  
もあさければ、えなり給はぬなるべし。みかど、れい

のまはらりておはしますおは、せんでいにいと  
ようにたてまつらせ給へる。おほんかたち、これは  
いますこしまさらせ給へり。あたらみかどのお  
ほんものゝけいみじくおはしますのみぞ、よに心  
うきことなる。ことしは御禊、大嘗會なくて  
すぎぬ。かゝる程におなじとしの十二月十三日、  
をのゝみやのおとゞ、太政大臣になり給ぬ。源氏の  
右のおとゞ、左になり給ぬ。右大臣には小一条のおとゞ  
なり給ぬ。源氏のおとゞ、くらゐはまさり給へれど、  
あさましくおもひのほかなる世の中をぞ、  
こゝろうきものにおぼしめさるゝ程に、としもかへ

五のみやぞたゞせ給ふ。おほんとし九にぞおはし  
ける。みかどのおほんとし十八にぞおはしまし  
ける。このみかどたゞせ給おなじ日、女御もきさ  
きにたゞせ給て、中宮と申。昌子内親王とぞ申  
つるか。朱雀院の御ころをきてを、ほいかな  
はせ給へるもいとめでたし。中宮のたいふに  
は、宰相ともなり給ぬ。東宮大夫には、中納言  
師氏、傳には小一でうのおとゞなり給ぬ。みな九条  
殿のおほんはらからのとのばらにおはすかし。  
たゞし九条殿の君たちは、まだおほんくらゐど  
もあさければ、えなり給はぬなるべし。みかど、れい

のおほんこゝちにおはしますおは、せんでいにいと  
ようにたてまつらせ給へる。おほんかたち、これは  
いますこしまさらせ給へり。あたらみかどのお  
ほんものゝけいみじくおはしますのみぞ、よに心  
うきことなる。ことしは御禊、大嘗會なくて  
すぎぬ。かゝる程におなじとしの十二月十三日、  
をのゝみやのおとゞ、太政大臣になり給ぬ。源氏の  
右のおとゞ、左になり給ぬ。右大臣には小一条のおとゞ  
なり給ぬ。源氏のおとゞ、くらゐはまさり給へれど、  
あさましくおもひのほかなる世の中をぞ、  
こゝろうきものにおぼしめさるゝ程に、としもかへ

是れらうはなんらうわたりて安和元年といふ  
正月のつかさめしに、さまさまのよるこびどもあ  
りて、九条殿の御太郎伊尹のきみ、大納言に  
なり給て、いとかなやかなる上達部にぞおは  
する。女君たちあまたおはす。おほひめぎみうち  
にまいらせ給はんとて、いそがせ給といふことあり。  
二月にとぞおぼしこゝろざしける。これをきこ  
しめして、中宮もさとしばしいでさせ給。うへの  
おほんものゝけのおそろしければ、このみやもさと  
がちにぞおはしましける。二月ついたちに女御  
まいり給。その程のありさまをしはかるべし。

みかど、いとかなひありて、ときめかせ給程に、いつし  
かとたゞにもあらぬおほんけしきにてものし  
給ぞ、いとゞゆゝしく、ちゝ大納言むねつぶれておぼ  
されける。おほんいのりをつくし給。みかどもいと  
うれしきことにおぼしめしたり。みつきになり  
ぬれば、ことによしそうしていでさせ給程、いみ  
じくめでたし。これにつけてもなを九条殿を  
ぞありがたきおほんさまにきこえさすめる。さて  
さとにいで給へるほども、うちよりおぼつかなさを  
おぼしきこえさせ給。中宮うちいらせ給へり。  
中宮のおほんかたのありさま、むかしも今もなを

りぬ。ことしはねんがうかはりて安和元年といふ。  
正月のつかさめしに、さまさまのよるこびどもあ  
りて、九条殿の御太郎伊尹のきみ、大納言に  
なり給て、いとかなやかなる上達部にぞおは  
する。女君たちあまたおはす。おほひめぎみうち  
にまいらせ給はんとて、いそがせ給といふことあり。  
二月にとぞおぼしこゝろざしける。これをきこ  
しめして、中宮もさとしばしいでさせ給。うへの  
おほんものゝけのおそろしければ、このみやもさと  
がちにぞおはしましける。二月ついたちに女御  
まいり給。その程のありさまをしはかるべし。  
みかど、いとかなひありて、ときめかせ給程に、いつし  
かとたゞにもあらぬおほんけしきにてものし  
給ぞ、いとゞゆゝしく、ちゝ大納言むねつぶれておぼ  
されける。おほんいのりをつくし給。みかどもいと  
うれしきことにおぼしめしたり。みつきになり  
ぬれば、ことによしそうしていでさせ給程、いみ  
じくめでたし。これにつけてもなを九条殿を  
ぞありがたきおほんさまにきこえさすめる。さて  
さとにいで給へるほども、うちよりおぼつかなさを  
おぼしきこえさせ給。中宮うちいらせ給へり。  
中宮のおほんかたのありさま、むかしも今もなを

いづくゆりもあわいんあひてふかきなを  
くくは世の中の人すみぞめにてくれにしかば、  
こそ御禊、大嘗會などのしるめれ。さまさまに、  
めでたきこと、おかしきこと、あはれにかなしきこと  
おほかめり。伊尹大納言一でうにすみ給へば、  
一条どのとぞきこゆる。その女御、世の中の大事  
いそぎどもはてゝ、すこしのどかになりて、みこ  
うみたてまつり給へり。おとこみこにおはすれ  
ば、よにめでたきことにおもへり。御うぶやの程  
のありさまいへばをろかなり。おほきおとどを  
はじめたてまつりて、みなまいりこみさはぎ

しり七日の夜はくはんがくあんの衆どもみなまい  
り、式部、民部のつかさみなまいりこみたり。  
一天下をしろしめすべききみのいで給へると、  
よるこびおがみたてまつる。おほちの大納言の  
おほんけしきいみじうめでたし。「九条殿、この頃  
六十にすこしやあまらせ給はまし」とおぼすに  
も、おはしまさぬをかうやうのことにつけても  
くちおしくおぼさるべし。七日のすぎ、つぎつぎ  
の御いかのおほん有さまいはんかたなし。源氏のお  
とどは、式部卿宮の御ことを、いとどへだておほかる  
こゝちせさせ給へし。みやの御おぼえのよになうめ

いとおくふかく、こゝろことにやむごとなくめでた  
し。こぞは世の中の人すみぞめにてくれにしかば、  
こそ御禊、大嘗會などのしるめれ。さまさまに、  
めでたきこと、おかしきこと、あはれにかなしきこと  
おほかめり。伊尹大納言一でうにすみ給へば、  
一条どのとぞきこゆる。その女御、世の中の大事  
いそぎどもはてゝ、すこしのどかになりて、みこ  
うみたてまつり給へり。おとこみこにおはすれ  
ば、よにめでたきことにおもへり。御うぶやの程  
のありさまいへばをろかなり。おほきおとどを  
はじめたてまつりて、みなまいりこみさはぎ



ふなをかまつのみどりもいろこく、  
ゆくす急はるかにめでたかりしことぞや」と  
かたちつゞくるをきくも、いまはおかしうぞ。「四の  
みやみかどがねと申おもひしかど、いづらは。源氏の  
おとゞのおほんむこになり給しに、ことたがふ  
と見えしものをや」など、よにある人、あいなきこと  
をぞ、御ものゝけいとおどろおどろしうおはしませば、  
さるべき殿上人とのばら、たゆまずよるひるさぶ  
らひ給。いとけおそろしくおはしますに、「けふ  
おりさせ給、あすおりさせ給」とのみ、きゝにく、  
申おもへるに、みかどゝ申ものは、一たびはのどかに、

一たびはとくおりさせ給といふことも、かならず  
あるべきことに申おもへるに、ことしは安和  
二年とぞいふめるに、くらあにて三とせにこそは  
ならせ給ぬれば、いかなるべき御ありさまにかと  
のみ見えさせ給へり。かゝるほどに、よの中にいと  
けしからぬことをぞいひいでたるや。それは、源氏  
の左のおとゞの式部卿宮の御ことを覚して、みかど  
をかたぶけたてまつらんとおぼしかまふといふ  
こといできて、よにいときゝにくゝのゝする。「いでや、  
よにさるけしからぬことあらじ」など、よ人申おもふ  
ほどに、ぶつしんの御ゆるしにや、げに御こゝろの

一たびはとくおりさせ給といふことも、かならず  
あるべきことに申おもへるに、ことしは安和  
二年とぞいふめるに、くらあにて三とせにこそは  
ならせ給ぬれば、いかなるべき御ありさまにかと  
のみ見えさせ給へり。かゝるほどに、よの中にいと  
けしからぬことをぞいひいでたるや。それは、源氏  
の左のおとゞの式部卿宮の御ことを覚して、みかど  
をかたぶけたてまつらんとおぼしかまふといふ  
こといできて、よにいときゝにくゝのゝする。「いでや、  
よにさるけしからぬことあらじ」など、よ人申おもふ  
ほどに、ぶつしんの御ゆるしにや、げに御こゝろの

中におまへらうきほりやわらへん正月廿  
六日うらの左大臣殿にけびいしうちかこみて  
宣命よみのしりて、「みかどをかたぶけたてま  
つらんとかまふるつみによりて、だざいごんのそつ  
になしてながしつかはず」ということをよみの  
のしる。いまは御くらぬもなきぢやうなれば  
とて、あじろぐるまにのせたてまつりて、たゞ  
いきにゐてたてまつれば、式部卿官の御ことち、  
おほかたならんにてだにのみじとおぼさるべきに、  
まいてわが御ことによりていできたることとお  
ぼすに、せんかたなくおぼされて、われわれもと

いであちさしがせ給。きたのかたの御むすめ、  
おとこきみだち、いへばをろかなるとの、  
うちのありさまなり、おもひやるべし。むかし  
すがはらのおとこのながされ給へるをこそ、  
よのものがたりなきしめし、か、これはあ  
さましういみじきめを見て、あきれまどひ  
て、みなよきさはぎ給もかなし。おとこ君たち  
のかぶりなどし給へるも、をくれじをくれじと  
まどひ給へるも、あへてよせつけたてま  
つらず。たゞあるがなかのおとこにて、わらは  
なるきみの、との御ふところはなれ給はぬ

中にもあるまじき御ことろやありけん、三月廿  
六日にこの左大臣殿にけびいしうちかこみて、  
宣命よみのしりて、「みかどをかたぶけたてま  
つらんとかまふるつみによりて、だざいごんのそつ  
になしてながしつかはず」ということをよみの  
のしる。いまは御くらぬもなきぢやうなれば  
とて、あじろぐるまにのせたてまつりて、たゞ  
いきにゐてたてまつれば、式部卿官の御ことち、  
おほかたならんにてだにのみじとおぼさるべきに、  
まいてわが御ことによりていできたることとお  
ぼすに、せんかたなくおぼされて、われわれもと

いであちさしがせ給。きたのかたの御むすめ、  
おとこきみだち、いへばをろかなるとの、  
うちのありさまなり、おもひやるべし。むかし  
すがはらのおとこのながされ給へるをこそ、  
よのものがたりなきしめし、か、これはあ  
さましういみじきめを見て、あきれまどひ  
て、みなよきさはぎ給もかなし。おとこ君たち  
のかぶりなどし給へるも、をくれじをくれじと  
まどひ給へるも、あへてよせつけたてま  
つらず。たゞあるがなかのおとこにて、わらは  
なるきみの、との御ふところはなれ給はぬ

うきこと、世にのゝしる。しきぶきやうの  
みや「ほうしにやなりなまし」とおぼせど、  
おさなきみやたちのうつくしうておはし  
ます、おほきたのかたのよをいみじきもの  
におぼいたるも、たゞいまはみやひとゝころの御  
かげにかくれ給へれば、えふりすてさせ  
給はず。いみじうあはれにかなしとも世の  
つねなり。すませ給みやのうちも、よろづに  
おぼしむもれたれば、おまへのいけ、やり水も、  
みぐさいむせびて、こゝろもゆかぬさまなり。  
さまさまにさばかりうへあつめ、つくるはせ

うきこと、世にのゝしる。しきぶきやうの  
みや「ほうしにやなりなまし」とおぼせど、  
おさなきみやたちのうつくしうておはし  
ます、おほきたのかたのよをいみじきもの  
におぼいたるも、たゞいまはみやひとゝころの御  
かげにかくれ給へれば、えふりすてさせ  
給はず。いみじうあはれにかなしとも世の  
つねなり。すませ給みやのうちも、よろづに  
おぼしむもれたれば、おまへのいけ、やり水も、  
みぐさいむせびて、こゝろもゆかぬさまなり。  
さまさまにさばかりうへあつめ、つくるはせ

ぞ、なきのゝしりてまどひ給へば、ことの  
よしそうして、「きはれ、それは」とゆるさせ給  
を、おなじ御くるまにてだにあらず、むま  
にてぞおはする。十一二ばかりにぞおはし  
ける、たゞいま、世の中になさしくいみじき  
ためしなる。人のなくなり給、れいのこと  
なり、これはいとゆゝしうこゝろうし。だい  
のみかどいみじうさかしうかしこくおはし  
まして、ひじりのみかどゝさへ申しみかどの  
一のみこ源氏になり給へるぞかし。かゝる御あ  
りさまは、よにあさましくかなしうこゝろ



手紙をきて冷泉院也まらふ寸あふは  
中々やうの御おとどは右大臣にておは  
す御禊大じようゑなどいとちかうなれば、世の  
人さはぎたちたり。かゝる程に、小一条の左大臣  
ひごろなやみ給ける、十月十五日御年五十にて  
うせ給ぬとのゝしる。宣耀殿女御、おとこきん  
だちよりはじめて、よろづにおぼしまどふ。  
いまの摂政殿の御はらからなれば、御ぶくになら  
せ給へば、大じやうゑのおりのこと、いとくち  
をしうおぼせど、などてか、御おとうとなれば、

一月の御ぶくこそあらめなど、  
さだめさせ給も、あはれなるよの中なり。  
れいのありさまもありて、はかなく  
としもくれぬれば、いまのうへ、わらは  
におはしませば、つごもりのついな  
に殿上人ふりつゞみなどして  
けしき まいらせられたれば、うへふりけうぜさせ  
も 給もおかし。ついたちになり  
ころろ ぬれば、天禄元年といふ。  
こと めづらしきおほん有  
なり さまにそへて、空の

一月の御ぶくこそあらめなど、  
さだめさせ給も、あはれなるよの中なり。  
れいのありさまもありて、はかなく  
としもくれぬれば、いまのうへ、わらは  
におはしませば、つごもりのついな  
に殿上人ふりつゞみなどして  
けしき まいらせられたれば、うへふりけうぜさせ  
も 給もおかし。ついたちになり  
ころろ ぬれば、天禄元年といふ。  
こと めづらしきおほん有  
なり さまにそへて、空の

一月の御ぶくこそあらめなど、  
さだめさせ給も、あはれなるよの中なり。  
れいのありさまもありて、はかなく  
としもくれぬれば、いまのうへ、わらは  
におはしませば、つごもりのついな  
に殿上人ふりつゞみなどして  
けしき まいらせられたれば、うへふりけうぜさせ  
も 給もおかし。ついたちになり  
ころろ ぬれば、天禄元年といふ。  
こと めづらしきおほん有  
なり さまにそへて、空の





七十一にぞならせ給ける。あはれにかなしき世の  
ありさまなり。七月十四日もろうぢの大納言うせ  
給ぬ。貞信公のみこ、おとこぎみ四どころおはし  
ける、みなうせ給ぬ。御とし五十五にておはしまし  
ける。かゝる程に、五月廿日、一条のおとど撰政の  
宣旨かうぶり給て、一天下わが御こゝろにおはし  
ます。東宮の御おほぢみかどの御おぢにて、いといと  
あるべきかぎりの御おぼえにてすぐさせ給。この  
御ありさまにつけても、九でうどのゝ御有さま  
のみぞなをいとめでたかりける。左大臣に源氏  
の兼明ときこゆる、なり給ぬ。これにだいごのみかど

の御子におはして、姓えてたゞ人にておはしつる  
なりけり。御てをえもいはずかき給。道風など  
いひけるてをこそは、世にめでたきものにいふめれ  
ど、これはいとなまめかしようおかしげにかゝせ給へり。  
右大臣にはをのゝみやのおとゝのみこよりたゞなり  
給ぬ。かくいふ程に、天禄二年になりけり。みか  
ど、御とし十三にならせ給にければ、おほん元服の  
ことありけり。九条殿の御次郎ぎみとあるは、  
いまの撰政殿の御さしつぎなり、かねみちとき  
こゆる、このごろ宮内卿ときこゆ、その御ひめぎめ  
参らせたてまつり給。撰政殿のひめぎみたちは、

七十一にぞならせ給ける。あはれにかなしき世の  
ありさまなり。七月十四日もろうぢの大納言うせ  
給ぬ。貞信公のみこ、おとこぎみ四どころおはし  
ける、みなうせ給ぬ。御とし五十五にておはしまし  
ける。かゝる程に、五月廿日、一条のおとど撰政の  
宣旨かうぶり給て、一天下わが御こゝろにおはし  
ます。東宮の御おほぢみかどの御おぢにて、いといと  
あるべきかぎりの御おぼえにてすぐさせ給。この  
御ありさまにつけても、九でうどのゝ御有さま  
のみぞなをいとめでたかりける。左大臣に源氏  
の兼明ときこゆる、なり給ぬ。これにだいごのみかど  
の御子におはして、姓えてたゞ人にておはしつる  
なりけり。御てをえもいはずかき給。道風など  
いひけるてをこそは、世にめでたきものにいふめれ  
ど、これはいとなまめかしようおかしげにかゝせ給へり。  
右大臣にはをのゝみやのおとゝのみこよりたゞなり  
給ぬ。かくいふ程に、天禄二年になりけり。みか  
ど、御とし十三にならせ給にければ、おほん元服の  
ことありけり。九条殿の御次郎ぎみとあるは、  
いまの撰政殿の御さしつぎなり、かねみちとき  
こゆる、このごろ宮内卿ときこゆ、その御ひめぎめ  
参らせたてまつり給。撰政殿のひめぎみたちは、

まゝいとおさなくおはすれば、えまいらせ給はず。  
いとこゝろもとなくちおしくおぼさるべし。  
宮内卿はほりかはなるいゑをいみじくつくり  
てぞすませ給ける。女御いとおかしげにおはし  
ければ、うへいとわかき御こゝろなれど、思ひきこえ  
させ給へる。うちには、ひとつ御はらの女九の宮、せん  
ていみじうおもひきこえ給へるを、このいまの  
うへもいみじうおもひかはしきこえさせ給て一ぼんに  
なしたてまつり給へり。うちのいとさうざうし  
きに、おかしくておはします。女十のみや、この御時  
に齋院にあさせ給にけり。九条殿の御三郎、

かねいゑの中納言ときこゆる、いみじうかしづき  
たてゝ、ひめぎみ二ところおはす。たゞいまの東宮  
はちごにおはします、うちにはほりかはの女御さぶ  
らひ給。きほひたるやうなりとて、冷泉院に此  
ひめぎみをまいらせたてまつり給。をしたがへたる  
ことに世の人申おもへり。撰政殿の女御ときこゆる  
は、東宮の御はゝにようごにおはす、その御ひとつ  
はらに、をんな宮ふたどころむまれ給にけり。されど  
女一の宮はほどなくうせませ給て、女二の宮ぞおはし  
ましける。それは院のくらゐにおはしましゝ  
おりならねど、のちにむまれ給へる、いみじううつ

かねいゑの中納言ときこゆる、いみじうかしづき  
たてゝ、ひめぎみ二ところおはす。たゞいまの東宮  
はちごにおはします、うちにはほりかはの女御さぶ  
らひ給。きほひたるやうなりとて、冷泉院に此  
ひめぎみをまいらせたてまつり給。をしたがへたる  
ことに世の人申おもへり。撰政殿の女御ときこゆる  
は、東宮の御はゝにようごにおはす、その御ひとつ  
はらに、をんな宮ふたどころむまれ給にけり。されど  
女一の宮はほどなくうせませ給て、女二の宮ぞおはし  
ましける。それは院のくらゐにおはしましゝ  
おりならねど、のちにむまれ給へる、いみじううつ



さねかたの侍も、此宰相をおやにしたてまつり給。此  
ひめ君の御あに、とおとこ君は長命君といひて  
おはす。おはきたのかたとりはなちて、びは殿にて  
ぞやしなひ奉り給ける。その君たちもたゞこの  
みやをぞもてわらひぐさにし奉り給ければ、とも  
すればうちひそみ給を、いとゞおこがましきことに  
わらひたてまつり給へるに、にくさは姫君をいとめ  
でたきものに見奉り給て、つねに、参り給  
けるを、宰相むげに心づきなしとおぼしなりに  
けり。この八のみや十二ばかりにぞなり給にける。此  
御心さまの心えぬなげきをぞ、宰相はいみじうお

ぼしたる。さねかた侍従、長命君などあつまり  
て、「むまにのりならばせ給へ。のらせ給はぬはいと  
あやしき事なり。宮たちはさるべきおりおはむま  
にてこそありかせ給へ」とてみまやの御馬めし出て、  
おまへにてのせ奉りて、さゝとみさはげば、おもていとあ  
かくなりて、馬のせなかにひれふし給へば、いみじうわらひ  
のゝしるを、宰相かたはらいたしとおぼすに、「いだけおろし  
奉れ、おそろしとおぼすらん」との給へば、さゝとわらひ  
のゝしりて、いだけおろし奉りたれば、むまのかみを  
ひとくちくゝみておはするを、宰相いとわびし  
と見給。女房たちなどわらひのゝしる。

さねかたの侍も、此宰相をおやにしたてまつり給。此  
ひめ君の御あに、とおとこ君は長命君といひて  
おはす。おはきたのかたとりはなちて、びは殿にて  
ぞやしなひ奉り給ける。その君たちもたゞこの  
みやをぞもてわらひぐさにし奉り給ければ、とも  
すればうちひそみ給を、いとゞおこがましきことに  
わらひたてまつり給へるに、にくさは姫君をいとめ  
でたきものに見奉り給て、つねに、参り給  
けるを、宰相むげに心づきなしとおぼしなりに  
けり。この八のみや十二ばかりにぞなり給にける。此  
御心さまの心えぬなげきをぞ、宰相はいみじうお  
ぼしたる。さねかた侍従、長命君などあつまり  
て、「むまにのりならばせ給へ。のらせ給はぬはいと  
あやしき事なり。宮たちはさるべきおりおはむま  
にてこそありかせ給へ」とてみまやの御馬めし出て、  
おまへにてのせ奉りて、さゝとみさはげば、おもていとあ  
かくなりて、馬のせなかにひれふし給へば、いみじうわらひ  
のゝしるを、宰相かたはらいたしとおぼすに、「いだけおろし  
奉れ、おそろしとおぼすらん」との給へば、さゝとわらひ  
のゝしりて、いだけおろし奉りたれば、むまのかみを  
ひとくちくゝみておはするを、宰相いとわびし  
と見給。女房たちなどわらひのゝしる。



あつしづり冷泉院のきさいの宮のみこもおは  
しまさず、つれづれなるを、「この八のみや子にしたて  
まつりて、かよはし奉らん」となんの給はするといふ  
ことを、宰相つたへきゝ給て、「いといとうれしう  
めでたきことならん。かの宮はたからいとおほく  
もたせ給へる宮なり。故朱雀院の御たからものは  
たゞこのみやにのみこそあんなれ。この宮は幸  
おはするみやなり。たかうのわうになり給なん  
とす」とて、よき日してまいりそめさせ給へり。  
中宮、さりととも、かの小一条の宰相をしへたて  
たらむこゝろのほどよなからんとおぼして、むか

へたてまつらせ、宰相いみじうしたてゝゐてた  
てまつり給へれば、見たてまつり給に、御かた  
ちにくげもなし。御ぐしなどいとおかしげにて、  
よおろばかりにおはします、うつくしき御なをし  
すがたなりや。やがてよびいれたてまつらせ給て、  
みなみおもてのひのおましかたにかしづきすへ  
奉らせ給て、御ともの人々にかづけもの給ひ、御  
をくりものなどして、かへしたてまつらせ給。もの  
など申させ給けるに、すべて御いらへなくて、たゞ  
御かおのみあかみければ、かぎりなくあてに、おほ  
どかにおはするなめりとおぼしけり。そのうち

かゝる程に、冷泉院のきさいの宮、みこもおは  
しまさず、つれづれなるを、「この八のみや子にしたて  
まつりて、かよはし奉らん」となんの給はするといふ  
ことを、宰相つたへきゝ給て、「いといとうれしう  
めでたきことならん。かの宮はたからいとおほく  
もたせ給へる宮なり。故朱雀院の御たからものは  
たゞこのみやにのみこそあんなれ。この宮は幸  
おはするみやなり。たかうのわうになり給なん  
とす」とて、よき日してまいりそめさせ給へり。  
中宮、さりととも、かの小一条の宰相をしへたて  
たらむこゝろのほどよなからんとおぼして、むか  
へたてまつらせ、宰相いみじうしたてゝゐてた  
てまつり給へれば、見たてまつり給に、御かた  
ちにくげもなし。御ぐしなどいとおかしげにて、  
よおろばかりにおはします、うつくしき御なをし  
すがたなりや。やがてよびいれたてまつらせ給て、  
みなみおもてのひのおましかたにかしづきすへ  
奉らせ給て、御ともの人々にかづけもの給ひ、御  
をくりものなどして、かへしたてまつらせ給。もの  
など申させ給けるに、すべて御いらへなくて、たゞ  
御かおのみあかみければ、かぎりなくあてに、おほ  
どかにおはするなめりとおぼしけり。そのうち

とらへりやうりまの物なやあ  
せの物なやあまの物なやあ  
まの物なやあまの物なやあ  
まの物なやあまの物なやあ  
まの物なやあまの物なやあ  
まの物なやあまの物なやあ  
まの物なやあまの物なやあ  
まの物なやあまの物なやあ  
まの物なやあまの物なやあ  
まの物なやあまの物なやあ

いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ  
いさやうにさうやうの物なやあ

ときどき参り給に、なをものゝ給はず。あやしう

おぼしめすほどに、きさいのみやなやましうせ

させ給ければ、宰相、みやの御とぶらひにいだしたて

まつらせ給。「まいりてはいかゞいふべき」との給はすれ

ば、『御なやみのよしうけたまはりてなん』とこそは

申給はめ」など、をしへられてまいり給へれば、れいの

よびいれ奉り給に、ありつることをいとよくの

給はすれば、みやなやましうおぼせど、うつくしう

おぼしめして、「きはのどかに又おはせよ」など

きこえさせ給。まかで給て、宰相に、「ありつる事、

いとよくいひつ」との給へば、いで、あなしれがましや、

いとこゝろづきなうおぼして、「いかで『いひつ』とは

申給ぞ。それはかたじけなき人を」と聞え給へば、

「をいをい、さなりさなり」との給ほど、いたはりどころなう

心うく見えさせ給をわびしうおぼす程に、天禄三

年になりぬ。ついたちには、かのみや、御さうぞくめで

たくしたてゝ、みやへいらせ奉り給。きこえ給へ奉

り給はずなりにけり。みやには、八のみやまいらせ給

て、御まへにてはいし奉給へば、いといとあはれに

うつくしと見奉らせ給。心ことに御しどねなどま

いり、さるべき女房たちなど花やかにさうぞき

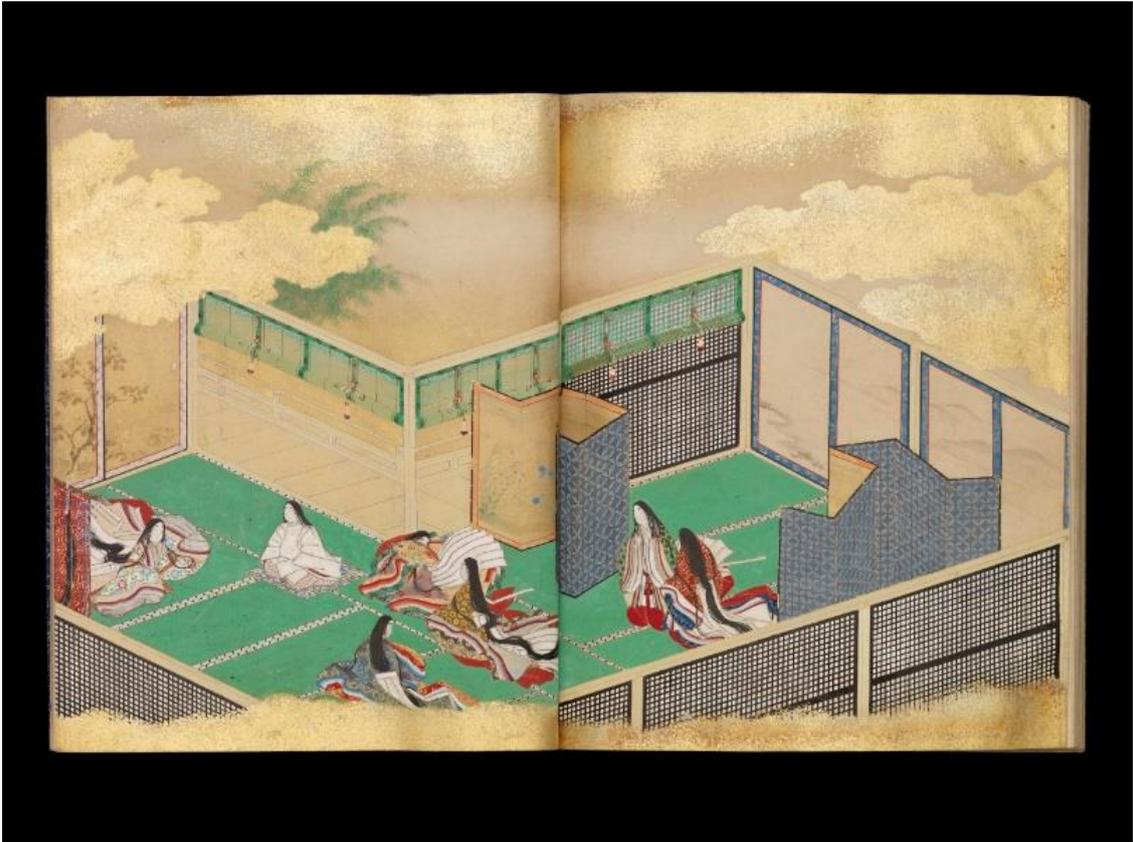
つゝいであて、「いらせ給へ」と申せば、うちふるまひひら

おぼゆるやうやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや

わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや  
わくはやくしをいれあかすはやくや

せ給ほど、いとうつくしければ、「あなうつくしや」  
など、めできこゆる程に、しとねにいとうるはしく  
ゐさせ給て、「なにごとをきこえ給べきにか」とあつ  
まりて、あふぎをさしかくしつゝ、をしこりてみな  
ゐなみて、かつは「あなはづかしや。小一条のひめぎみ  
の御かたのいみじからんものを」などきこえあへる程  
に、うちこはづくりて申いで給ことぞかし、いと  
あやし。「御なやみのよしうけ給りてなんまいりつ  
ること」ゝ申給ものか。こぞの御なやみのおりに参り  
給へりしに、宰相のをしへきこえ給しことを、正月  
のついたちのはいらいにまいりて申給なりけり。

みやの御まへあきれてものもの給はせぬに、女房  
たちなにとなくさもわらふ。「よがたりにもしつ  
べきみやの御ことはりなど」さゝめき、しのびもあへず  
わらひのゝすれば、いとはしたなく、かほあかみて  
ゐ給て、「いなやおちの宰相の、こぞの御心ちのおり  
『まいりしかばかう申せ』といひしことをけふはいへば、  
などこれがおかしからん。ものわらひいたしうしける  
女房達おほかりけるみやかな。やくなし。まいら  
じ」と、うちむづかりてまかで給有さま、あさま  
しうおかしうなり。



小糸よりかきしてわいさうきらくわわと  
 ほきくわわりゆをくまわなふんううや  
 まことけへしはこわまよふくまのわ  
 くらあうりうわなうわうとわわ  
 やのうりうまのりうまやわわわ  
 はわわとわわうまゆりてなんまうは  
 うはうとわわの十女人とわわてりてわ  
 うわいもくまわうまうまわわわ  
 おまわわとわわてのわわとわわわ  
 とわわてまふくまのわわわわわ  
 むくものわわわわわわわわわわわ

うまのうまにせ

わわわわわわわ

わわわわわわわ

いほくわわわわわ

わわわわわ

こまわわ

わわわわ

わわわ



小一条におはして、「あさましき」とこそあり

つれ」とかたり給へば、宰相「なにごとにか」と

きこえ給へば、「いまはみやにすべてまいらじ。

たごころしにころされよ」との給はすれば「いな

や、いかにべりつることぞ」ときこえ給へば、

『御なやみのよしうけ給はりてなんまいりつる』と

申つれば、女房の十廿人といであて、ほととわらふ

ぞやいとこそはらだゝしかりつれ。さればいそぎ

出できぬ」との給へば、との、いとあさましういみじ

とおぼして、すべてものもの給はず。「いなや、とも

かくもの給はぬは、まろがあしういひたることかこ

ぞまいりしに、申せと

の給しかば、それを

わすれず申たるは、

いづくのあしきぞ」と

の給をいみじ

とおぼし

いたり

めり。



